

乳児院における養育への愛着理論の応用

Qソートによる愛着の測定

立元 真

(名古屋自由学院短期大学)

乳児院における子どもの養育を向上するためには施設や職員配置などのハード面での改革が重要であるが、他方、保育周辺領域の知的資産を取り入れていくこともまた課題の一つである。本報告では、心理学領域で洗練されてきた愛着理論およびその技術的資産（具体的には、Qソートを用いた愛着の測定とその応用）を加えていくことを提案したい。

乳児院は、生後1年未満の乳児から通常は2歳前後、場合によってはそれよりもやや年長ぐらいまでの子どもが措置されている。乳児院で生活する子どもたちは、本人の意志に関係なく、親のやむを得ない事情やその他の事情で措置され生活している。

通常、日本の、この時期の子どもの一般的な子どもの養育形態は、両親がそろい、母親が中心になって子どもの世話を担当することが多い。出生前からまた出生間もなくからの、通常最も接触の多い母親（あるいは、それに代わる養育者）とのやりとりのなかで、子どもは母親に対する愛着を獲得し、その後の対人関係の基礎となる内的ワーキングモデルをつくりあげる。この内的ワーキングモデルを基礎に、父親やきょうだいやその他の家族へと徐々に対人関係を広げていく。また、母親に対する愛着は、子どもが外界の事物に対する探索行動を行う際の、心の安全基地としての母親の存在の基礎となる側面もある。2者の愛着-養育関係から外界の事物を交えた3項関係へと発展することで、子どもの知的な発達重要な鍵となる。

乳児院で生活している子どもたちは、さまざまな事情で入所してくる。遺棄、あるいは養育拒否、虐待、片親あるいは両親の死亡や入院、さまざまな理由によって両親が子どもの養育をすることができないなどの措置理由が挙げられる。それにともなって、子どもの入所までの養育状況や、入所年齢、措置されている期間、さらには障害の有無など多くの変数が介在する。これらの変数の中で、乳児院の養育で重要なポイントとなることは、養育担当者に対してどのような愛着を形成するかということである。虐待や両親の養育能力不全などの理由で入所してきた子どもたちは、養育担当者との間に改めて愛着関係をあらためて構築する必要がある。また、多くの場合、乳児院に子どもが措置されている期間は、相当長い期間に及ぶことが多い。

したがって、養育担当者は、入所した子どもの発達にとってまず必要な愛着対象者になることは必要とされる場合が多い。

そう考えてくると、乳児院において保育を行っていく際に、当該の子どもと養育担当者とのあいだに愛着関係が成立しているか否か、またそれは順調に発達しているのか否かを測定する必要性が生じてくる。さらに、愛着関係は経時的に変化していくことが予測されるので、その経時的変化をたびたび測定することが必要となってくる。

愛着の測定

愛着の測定には、愛着の発達と個人差という2つの測定の次元がある。

愛着の個人差の測定

愛着の個人差の測定法としては、①Ainsworth & Witting (1969) によるストレンジシチュエーション法、②Waters & Deane (1985) によるQソート法、また、③経験的な知識で日常の観察の中から子どもの愛着の個人差を判断する方法の3種類が挙げられる。それぞれの方法には一長一短があり、①ストレンジシチュエーション法は、定められた広さの空間を用意することなどのあまりに定式化された方法と、測定の度に子どもを極端な不安状態に追い込んでしまうといった問題点があり、乳児院のような施設における日常的な測定には向かない。また、③の方法は、観察者自信の経験と情報に依存するために、客観的な評価が難しいといった難点がある。また、②のQソート法による方法は、国内ではまだ使用例が少なく一般的に知られていないといった問題がある。ストレンジシチュエーション法とQソートの方法のいずれがよいのかについては、意見の別れるところであるようだが(近藤, 1993a, b; 数井, 1993)、乳児院での使用に限っては、米国である程度方法が確立していることと、子どもに与える影響が少なく使用法が比較的簡便であることから、Qソートを使用することを前提にして話を進めたい。

新しい乳児院養育指針(案)では、愛着の個人差についてはあまり頁をさいていないが、これはむしろ、子どもの愛着行動の個人差を理解することは、望ましい子ども-養育者関係を構築する上での基本中の基本

であるという共通理解の上に立つものであるためと考えられる。かなり客観的な目をもった養育者もいれば、その能力がまだ発展途上にある養育者もあり、その援助となるツールとしてのQソートの適用を提案したい。愛着の発達の变化の測定

愛着の発達段階については、ボウルビィ(1976)による発達段階が知られているが、知能検査や発達検査のような細かな段階までチェックできるものではない。Qソートの90項目に及ぶ質問項目の中には、ボウルビィ(1976)が示した発達段階の中の子どもの行動と一致した項目が含まれている。よって、これらの処理の仕方によって発達状況を示すことが可能である。さらに、90項目の中で、特に発達の变化の激しい項目を選定し処理することによって愛着行動の発達の变化をとらえ、それを標準的な愛着行動の発達の变化との比較による発達指数を算出することも可能であろう。なお、愛着行動は個人差の大きいものであり、そのためどの程度まで発達の变化を明示し実用化するかが今後の課題である。

測定者間の差異について

現段階の、Qソートによる乳児院における愛着の測定は、主に愛着の個人差の測定に限られている。

愛着の測定は、測定者が当該の子どもの養育担当者である場合と、子どもと養育担当者を客観的に見ることが出来る立場にあるかによって異なってくる。そのため、両者は別個のものとして扱う必要がある。

前者の関係においては、当該の子どもが養育担当者にしかみせない愛着行動までも含めて測定できる利点がある。その反面、養育担当者の当該の子どもに対する思いが反映されてくる場合もあり、この相違に対して臨床的な判断が必要とされる。Fig.1.に示した測定例では、b児の担当者である養育者Aに対しては、b児は強い甘えを示しているのに対して、養育者BおよびCに対してb児は危機的な時のみの救援を求めることを示している。新人の保育者である養育者Cは、b児の日常の甘えはむしろ少ないとすら評価している。また、愛着障害が疑われるa児については、3者とも同じ様な傾向の判断を行っているが、a児の兄の担当でありA児に対しても特別な思いを持っている養育者Bは、A児の愛着行動を特に敏感に感じ取っているようである。

実用化に向けてのいくつかの問題

乳児院でQソートを用いて愛着の測定を行う際には、“母親”を“養育者”、“家庭”を“施設”と読み替え、また、乳児院内ではあまり起こりえない状況では、

“もし、そのような状況であったら当該の子どもはどうであると想像されるか？”と読み替えることで対応している。Qソートの90の質問項目は、そもそも通常の家庭の母親と子どもを前提にして作られたものである。しかし、乳児院における子どもの生活は、通常の家庭を模していく方向で改善がなされてはいるものの、どうしても通常の家庭とは異なった環境となってしまう。そこで、今後、Qソートの質問項目の中のいくつかの項目を、乳児院の標準的な生活環境に合わせて変更していく必要がある。

また、これに付随して、標準化データの問題もある。Qソートは“専門家による判断”に基づいて作成されており、知能検査や発達検査などのような国内での標準化データに基づいたものではない。現在、使用している感覚ではそれほどの不自由は感じていないものの、普及を進めていくに当たってはわが国の標準化データに基づいたテスト法としての検討が必要となってくるだろう。

さらに、乳児院に限らず、保育所における乳児保育や幼稚園入園時における母子分離の場面などにおいて、Qソートによる愛着の測定は応用可能であり、また実用的であるとも考えられる。今後、この領域においても検討を進めたい。

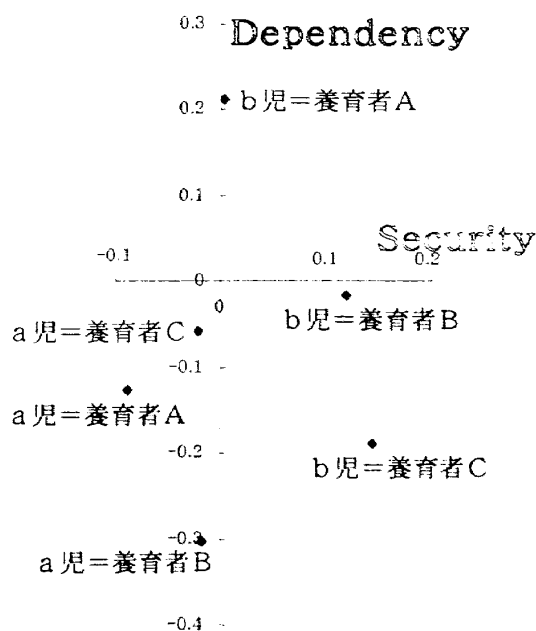


Figure 1. 3名の養育者による乳児院入所児2名の愛着の評価

引用文献

- 数井みゆき 1993 近藤論文への意見 発達心理学研究 4(2) 181-182.
- 近藤清美 1993a 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定 発達心理学研究 4(2) 108-116.
- 近藤清美 1993b 数井論文への意見 発達心理学研究 4(2) 182-184.
- 近藤清美 Vereiken C.M.J.L. 1993 Qソート日本語版 非公刊
- ボウルビィ 1967 母子関係の理論① 岩崎学術出版社